

新発見の古筆手鑑

石井裕

この春、新発見の古筆手鑑という記事が、新聞誌上で報じられた。これはその内容に優れたものがあり、美術的価値が高いものがみられたためである。

古筆とは、ふつう平安―鎌倉時代の詩歌を書いた名筆を指すが広い意味では古い書跡全般といえよう。しかし書道の上からいえば平安時代に重点を置くものである。

この新発見の手鑑は比較的大型のもので、厚手の台紙を折帖風に仕立て、もと巻物や冊子を切断分割した写経、詩歌集、物語ほかの断簡や書状・懐紙・色紙・短冊などを貼り込んだものである。

表紙裏表紙の見返しは狩野常信が四季絵を

描いている。手鑑を収納する古い桐箱には、「土屋能登守」の墨書があり土屋家伝来のものであったと考えられる。同時十七世紀末から十八世紀初め頃の制作と推定される。

この帖が拙宅に届けられたのは川崎市民ミュージアムにお勤めの白石氏から話があったことによる。市民ミュージアムで確かな鑑定を考えているとのことなので私が最初に鑑定する機会に恵まれたのである。

手鑑は表に百六十七枚裏に百七十六枚総計三百四十三枚が収録されており、奈良時代から江戸前期までの品々が貼られている。

巻頭には古写経の優品「大聖武」賢愚経断簡、「高野切第二種」(古今集断簡)これは一見して価値の高い手鑑であることがわかる。

第八回 リテラの会

(文芸学会卒業生の会)

第八回リテラの会は、九月十五日(金)に、元文芸科非常勤で、女性史がご専門の尾形明子先生を迎え、「女性作家の愛と生―長谷川時雨とその周辺―」というテーマで講演をしていただきました。

樋口一葉を除くほとんどすべての女性作家たちが集ったという雑誌『女人芸術』。先生は、「雑誌のおもしろさは、時代がそのまま見えてくるところ」と語り、この、女性の活気溢れる雑誌のお話を軸に、尾形先生が女性作家を研究することになったきっかけや、「女人芸術」を発刊した劇作家、長谷川時雨の年下の少年との恋愛の話など、興味深いお話が次々にとび出し、一時間が瞬く間にすぎました。

講演会の後は、会の運営報告をはきんで出席者の懇親会が開かれました。お世話になった先生方を囲んで、先生方の最近の様子や、各方面で活躍する卒業生の近況を伺ったり、初めて出会う卒業生同士もまるで同期生のように、文芸科の思い出などを

更に小野道風自筆の「絹地切」がある。これは、中国唐の詩人白楽天の詩文集「白氏文集」巻第四新楽度「紅線毯」の一部分。

「於藍織作披香殿裏披香殿廣十丈餘紅毯織成殿鋪彩絲茸々香蒲（藍よりも紅なり。織て披香殿の裏の毯と作す。披香殿の広さ十丈餘紅毯織り成して殿に鋪く可し彩絲茸々として香茸々たり）の四行二十九字である。

この白氏文集断簡、筆者は少野道風、このことにより新聞社がニュースとしてとりあげらるにふさわしいと思ったのであろう。

高野切というのは現存する古今集の写本として最古のもので筆者を紀貫之と伝える。平安時代書写のかなの最高のものである。

その他観るべき筆跡が十二、三点あったので原寸焼付写真を依頼してをいたが未だ送ってこない。

手鑑の優品としてはMOA美術館の翰墨帖、出光美術館の見ぬ世の友、京都国立博物館の藻塩草などがあるが国宝に指定されている。

勿論この三大手鑑のほかにも五島美術館・逸翁美術館・徳川美術館・その他、宮家や旧大名家などで所蔵されている。手鑑に貼ってあるものが全部名品というわけにはいかぬか

ら次に何が貼られているかと頁を追っていく楽しみがあるので、それが又勉強になる。

この手鑑は私が鑑定したときは非大切にしておいた旨を告げた。その後所蔵者から市民ミュージアムに寄贈されたのは何よりもよろこばしいことである。

ミュージアムでも重要美術品として文化財の指定を受けることを検討し、東京国立博物館に依頼した。博物館に依頼したことにより新聞社の方にも伝わってニュースになったわけである。

この複製本が淡交社で出版されることになるともきいている。

現在は古い手鑑なので修理を博物館に依頼したのことも聞いている。

手鑑は私は書の立場から、国文学者は古写本の資料として、それぞれの立場から関心をもって調査されるのであろう。

近年古書展でも手鑑が数点出品されるがなかなかよいものは出ないが、このように旧家の倉の中に眠っているものが皆無とは思えぬので、又よい機会に恵まれぬかと心待ちしているのである。

語り合いながら楽しい時間を過ごしました。

〔昭和六十一年度卒業 田畑佐貴〕

平成七年九月十五日（金） 午前十時半

於 文教大学経営情報専門学校（旗の台

校舎）

〔講演〕「女性作家の愛と生

——長谷川時雨とその周辺——」

東京女学館短期大学教授

尾形 明子先生

〔懇親会〕

専門学校 食堂

